山海名產圖會　二

日本山海名産圖會巻之二

○目録

○豊島石　○御影石
○龍山石　○砥礪
○芝　○日向香蕈
○熊野石耳
○同　蜂蜜　蜜蠟　會津蠟

秋田勇五郎

○山椒魚

○山蛤

○鷹羅

○豫刕峯越鳬

○捕熊

陸弩

洞中熊

以斧撃

取膽

試眞偽

製偽膽

攝刕霞羅

無雙返

○鳬羅

○鷹峯蘡薁虫

○吉野葛

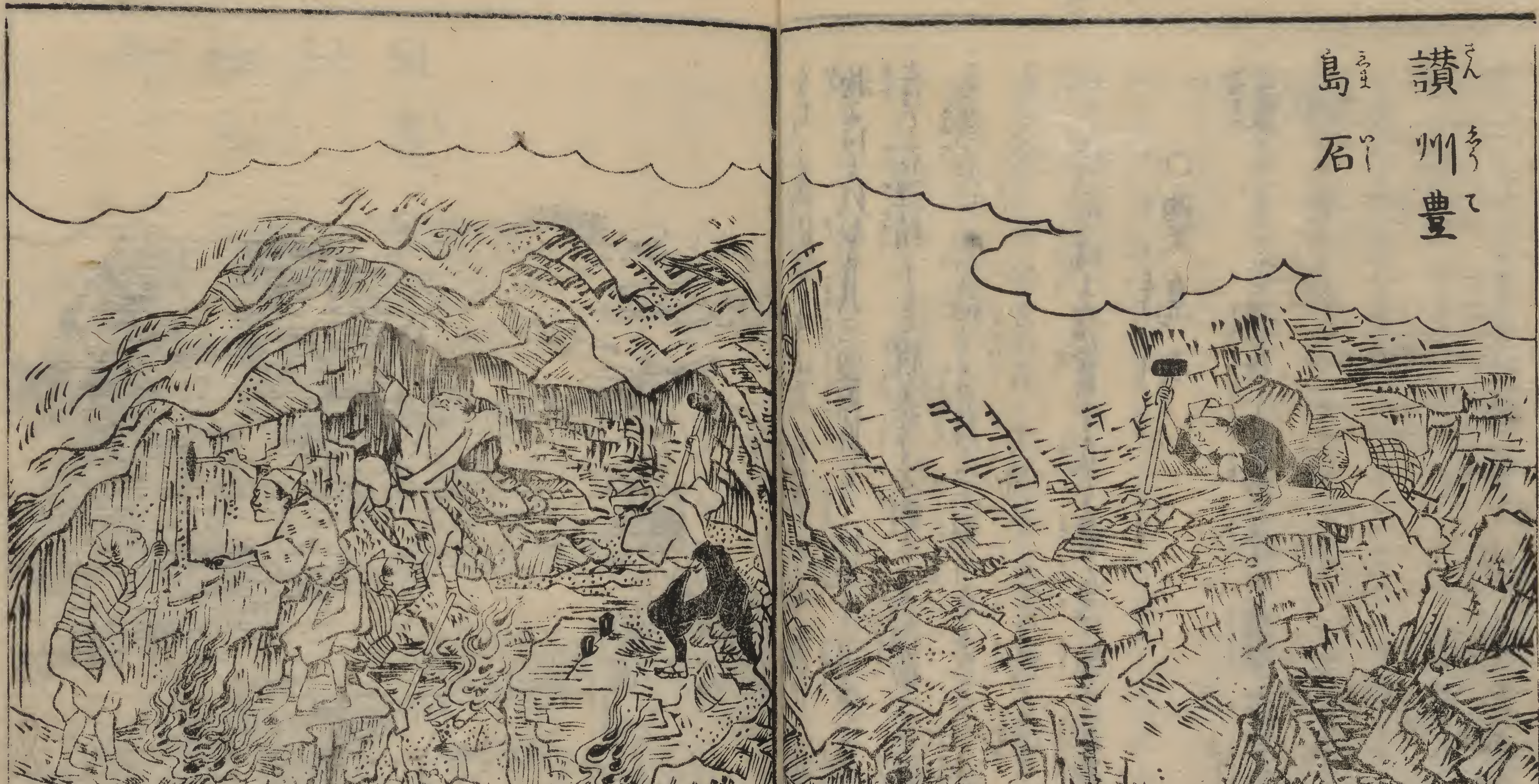
石品

石ハ山骨なり物理論云土精石となる石ハ氣の核なり氣の石を生ずるハ人の筋絡爪牙のごとし云くされども其石質にいたりてハ萬國萬山の物悉く等からず是風土の変更なれバ即山氣をうけて生ずるものなるべしうり又草木魚介皆よく化して石となるもあり本草に松化石宋書に柏化石稗史に竹化石あり代醉編に陽泉夫餘山の北より清流數十歩草木枝葉皆化して石となるスイタリヤの内乃一國に一異泉より何の物といふことなく其中に墜まバ半月にして便ち石皮を生じ其物を裹又歐邏巴の西國に一湖有て木枝内に挿さんで土に入る一段化して鉄となり水中ハ一段化して石となるとぞあり本朝又ある所多し凡寒國の海濱湖涯いづれもあるものにて器物等の化石と其所にあると知べ塵し又石に鞭うちて雨を降しるなどいふる陰陽石ありて日本にても寶

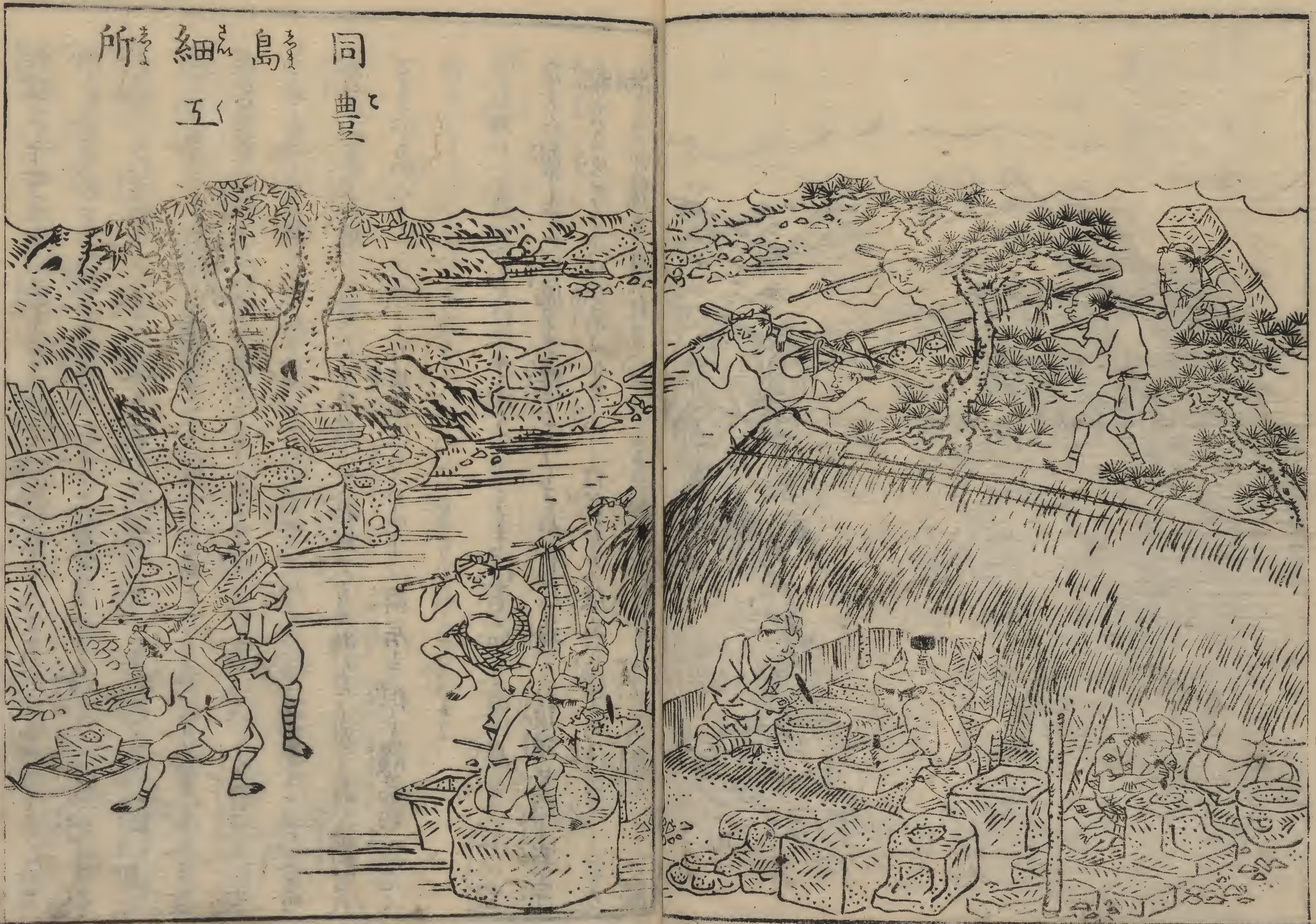
亀七年仁和元年及東鑑等にも其例見えたり江州石山は本草より
ころ陽起石にて天下の奇巖なり又日本記雄畧の皇女伊勢斎宮
よき人世経ひしに邪陰の誣ことがひよりて皇女の腹中を開き世経ひに
物ありて水のごとし水中に石ありといふ是醫書に云石瘕なる事しるべ
物の變なることを理におひてハ一なり品類におゐてハ鐘乳石 慈石 礜石 滑石
礬石 消石 方解石 寒水石 浮石 其餘の奇石怪石動物などハ最に
近江の人の輯作せる雲根志にて盡ぬまでハ悉く辨ずるに及ばず
○イシといふ和訓ハシとらへシは本語にてシてりこツムと俗にいふシツカリなどのごとく物の凝り
定まりたるの言なり○イハといふハ石歯なり盤の字をも書るハいかほら成大石にて
歯牙のごとく健利の意なり○イハホといふハ巖の字をよみて詩経維石巖々と
いひしおもむき尖利なるを云なり萬葉にはイハホとかきて秀出の義
なり又いを同じともいへりかならず溥して惣て成いしともいそともいはずして通
じていへり○日本にて器用に造る物もしれかぞへがた然れども五畿内西國に名たるが
うちに御影石 立山石 豊島石等ハ材用に施し人用にも益ありて諸
物によろしく故に其三四箇條を下に挙て其余を畧す○和泉石ハ色必
青く石理精くして碑文等を刻むに又阿州より近年出るもの是に類
ス其石紀州に似て色緑に石形行そろふごとし石質ハ硬からず又城州
まてハ鞍馬石 加茂川石 清閑寺石等是を庭中の飛石捨石に置き
水を保ち世濡るを賞し凡く貴人茶 茶の翫物に施す

○豊島石

大坂より五十里讃州小豆島の邊にて廻環三里乃島山なり家浦か
と村ある村の三村にり 家の浦ハ家數三百軒斗かあると村ある村ハ各百七八
十軒ぞありて中にもかろくとよく出る物なり硬くして鳥井土居の類是を
以て造製すなる此山ハ他山まことかはり山の表より切堀取すにはいたら
唯山に穴して金山の坑場に似たり洞口を開きて奥深く堀入て數丁を縦横と


讃州豊島石

同豊島細工所

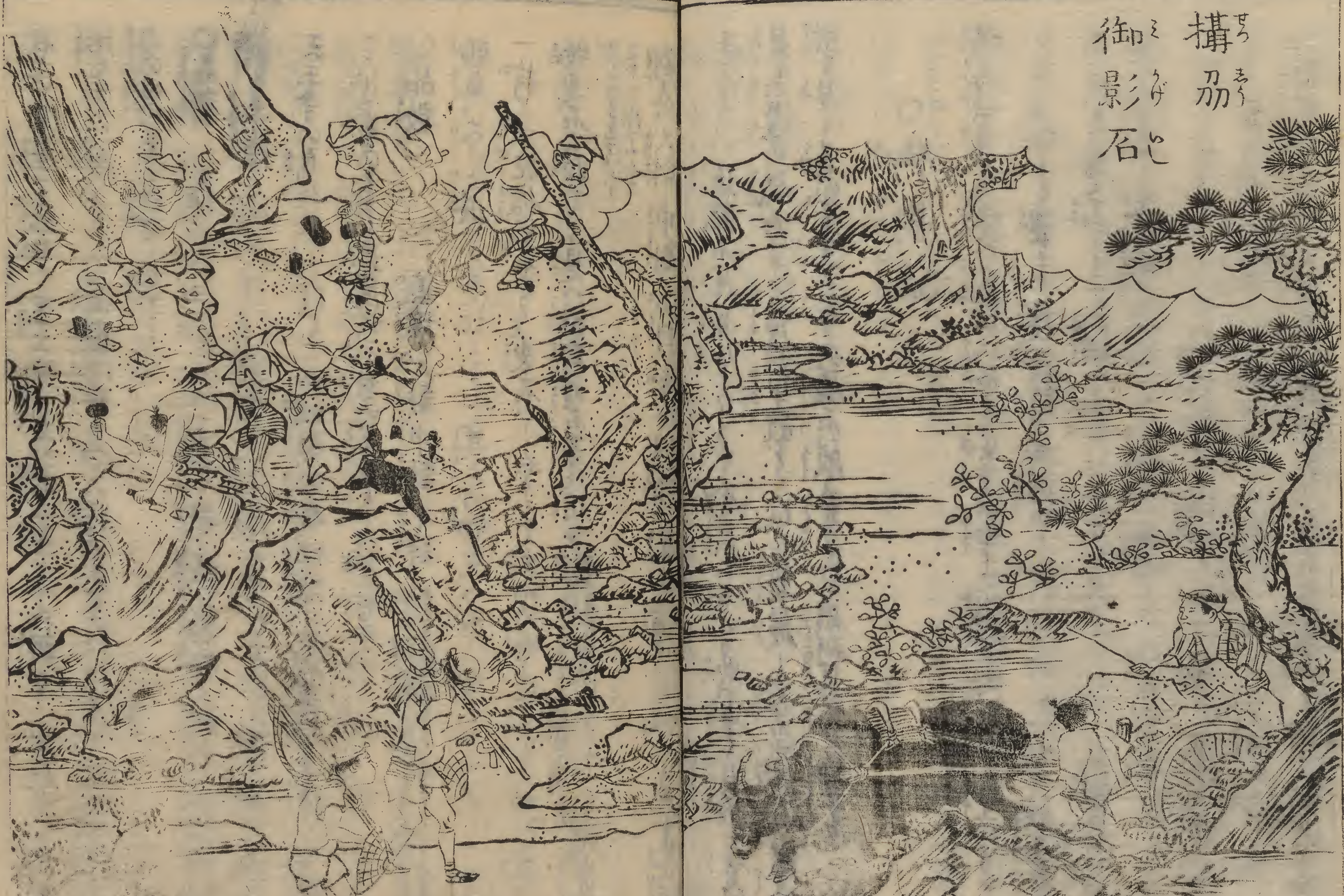


切抜こと十町廿町の道をなせり。採工松明を照しぬれバ穴中真黒にして石も土とも分ちがたく、採工も常の人色とは異なりがたく堀入こと如何とすれバえびたりは皮ありて至て硬し。是今称ぶ川と号て出せし物にて（本称ぶ川やハ伊豫也）又を金を破取にすりせバ、そぐ幾重にも片ざいろのごとなり流布の豊島石と其石の實なり。故に皮を除て堀入る事たやすく中にも家の浦にある数穴七つ有。されども一山を越えて隔る所なれバ器物の大抵を山中に製して採出せり水筒水走火爐一ツ竈などの類にて格別大なる物ハなし。から村ハ漁村なれども石もかろうとの南より堀出し石工ハ山下に群居す。但し讃州の山ハ悉く此石のごとくにて弥谷善通寺大師の山石窟も此石にてそ造れり

○石理ハ　礒落のあたりまで凝そるゆゑに浮石に似て石理麁なり故に水盥などに製しても水漏りて器をなしがたし。されども火に觸ても損壊せず。下野宇都宮より出せるもの此石に似ておりしはたなり。浮石ハ海中の沫の化しそる物にて伊豫、薩摩、紀州、相模より産して其山も海中の島山なれバ關闢以後汐の凝そる物ともいふべし。かつ此仕方塩飽の石も是ハ塩泡の凝りしそのなり。○塩飽石ハ御崗山となりて今またを号る物ハ多く貝附を賞じ是其邊の礒石にて石理粋ならねどもしはく質ハ硬し。庭石水鉢に石等に用て早く苔のおふるを詮とし礒石ハ波に穿されて磈硐異形を珎重とす

○御影石

摂州武庫菟原の二郡の山谷より出せり。山下の海濱御影村に石工ありて、是ら器物にも製して積出し故に御影石とはいへり。御影山の石ハ城州加茂あふひ石を採る山にして此國に山石たるふはあらざれバ村中の御影の松有し讃古今集に基俊卿の古詠にもわがえ此山ハ海濱にて往昔ハ牛車などは賣へまろそとハなるもしに今ハ海諸次第に侵埋て山に遠ざかるも石も山中の物ハ取盡ぬれバ今ハ奥深く採りて廿丁も上の住吉村より牛車を以て継て御影村へ出せり。有馬街道生瀬川原などの石も此奥山とはなれども此上品の


搆刕御影石

石といふもの至て色白く黒文なし是ハ背に出て今ハ鮮なり。されども其書
用をなさんに厭ハずして高嶽深谷に入てハ得ざることにはあらねども運送手
力の便なき所のみ多し

○石質　文理ハ京白川石に似て至て硬し故に器物に制するに微細の接
合も手練に應ず白川ハ酒落して工に任せず石工大なる物に至てハ雑渡
天王寺の鳥井なんど残なく此城廓。石榔。佛像。墓牌。築垣に造て琢磨を
てハ皮膚のごとし是萬代不易の器材天下の至寶なり

○品數　直塊ハ大鉢。中鉢。小鉢。体よく洋氷鉢は用るよし本語にはなく もとも柱礎溝石なんどに用るし
頭無ハ太さ大抵一尺五六寸にして其上の物を一ッ石と号くズ六尺ともいふ
一荷に六ツ完擔の石なり栗石ハ小石にして大雨の時には山谷に轉び落つる
物也へ石に接なし是ハ鉢前時石等に用ゆ 石をくりといふこと應神記の号にみへたりといへども山道の俗
言なりともいへる大小 よかへるばいかんぞ
剅石ハ大剅 中剅 小剅 延条 長く切たる 蓋石 大抵長二尺五幅いづれも築石ニ類

橋臺　石橋　庭砌　土居など其用多く又石橋に架る物則ち河次ハ所に出
石も有なり○切取ハ矢穴を掘て矢を入金をなげ石を放して完の倉るを
手鉾をもて離取と手附割とあり又横文字に割るをいふ割といふなり

○龍山石

播州に産して一山一塊の石なる故に樹木さくれし往く此石山を多くなれども運
送の便よきき所を切出して今は堀採やうになれども運送不便の山をもとづら
に存して切へる事なし石の寶殿ハ即立山石にて其邊を使所として専
切出し採法をへてかくることなし故に圖も略せり色ハ五條を混ぜ切て形を
成ことを皆方條にのこりハ溝渠河水の涯岸或界壁の敷石敷居の土居
庭砌等の用に捺て他の器物に製することなし大さは三四尺より七八尺までも
及び方五寸に六寸の物或五六といひ五寸に七寸と五七といひて尚大なる品
數あり　麓の穂市村に石工あり南の尾崎に龍が端といふ

砥石山

○砥礪　精なるものを砥といひ粗きものを礪といふ

諸国に砥ハ王城五里を離れて帝都に随ひて産すといへども定かならず
かし背和刕春日山の奥より出せし白色の物ハ刀劔の磨石なりしが今ハ
堀てなく其跡のミ残れり今ハ城刕嵯峨辺鳴瀧高尾に出る物天下の上
品にて他に類ひ鮮し是山城丹波の境原山に産して内曇又浅黄ともいふ又丹
波の白谷よりも出て是等ともに刀劔の磨石或ハ剃刀其余大工小工皆是を用ゆ
又上刕戸沢砥ハ水を用ひずして磨べき上品にて参河名倉砥ハ淡白色に
斑ありて越前砥ハ俗に常慶寺と唱ふるもの内曇には劣れり以上磨石乃品
にして本草是を越砥と云　いづれも石に皮ありて山より出る時ハ四方に長く切りて馬に四本宛負ふすと規矩とし

○青砥ハ　平尾　杣田　南村　門前　中村　井手黒　湯船等なり中にも
南村門前ハ京より七里ばかり東北にあたりて周廻七里丹山より丹波に猪倉　佐伯　芦
野山　扇谷　長谷　大渕　山石谷　宮川　其外品数多肥前に天草　豫
刕に白赤等あり又中砥とも云なり各美悪の品級尽く弁ず
あるに至りてハ石磨石中砥ともに皆山の土石に接る物なれバ山
口に坑場を穿深く堀入る所にハ窓をひらき栄螺の炷を携へて
石苗を逐ひ金山の礦を採るに等し石尽れバあらたに諸架
木を取捨て其山坎崩せり故に常も穴中山崩るべきやうにて甚
恐ろしく其職工にあらざる者ハ窺ふべし身の毛をよだつ　○石質
によりて其工用に充ることのハ下に別記す中にも鏡磨又金工物の薄キ
磨くにハ對馬の虫喰砥なり是よりに今もて破割物を磨ぎて刀磨くに八用
ざれども根細工の摸擦に適用とし但し細の鍍金などを擣り擦には伊
豫の白砥を用ゆ此白砥ハ又一奇品にして谷中に散集あり石屑を人毀
ちこれぞとるとも和合し再ぞなび一顆塊の全石となるなり故に偶木の葉を
挿て和合し奇石の木の葉石とするもの多くハ此山に得る所なり

○礪石　肥前の唐津紋口紀刕茅が中神子が濱或ハ豫刕に

出るものハ石理精しく是等皆堀取にハいふく一塊を山下へ切落し
それを幾千挺の數にも鎖して出す
○工用ハ　刀劔假治に臺口磨工の青茅　白馬　茶神子　天
草　伊豫　又浄慶寺等次第に精を経て猪倉　内曇に合せ
後上引をなしく青雲の光艶を出す　上引とハ内曇りの石屑也但し鳴瀧の地艶にもいひて猪倉の部也
用ゆるものなり是を　○剃刀ハ　荒磨と唐津　白馬　青神子　茶
力士ともいふ
神子　天草に抵て鳴瀧高尾等を合せ用ゆる　○庖丁ハそのまゝに
庖丁ハ臺口中砥平尾杣田等にて磨き磨石にハ及ばず又薄刃菜刀の
類も荒磨ハ臺口　白馬　青神子　茶神子　白伊豫上ハ引ぬきて色
付とする　○淺き唐津　神子濱に磨ぎて豫刕の赤にて落すなり
○大工并箱細工指物等ハ門前　平尾　杣田の青砥にかけ鳴瀧　高
尾等に磨きて○料理庖丁ハ山城の青○小刀ハ南村○竹細工ハ天草
○針毛抜ハ荒磨を土佐にて豫刕白赤にて落く○彫形ハ豫刕の白
○紙裁ハ杣田　大抵かくのごとし凡工用とするに硬き物へ柔和なるに
抵て柔軟なるハ硬きに磨といへども其金質石質相和する自然
なりて一概にハ定めがたし

芝之菌品

地に生るを菌又蕈といふ木に生るを茸といふ菌ハ和名飲タケ茸を
キノコともに訓て菌に數種あり木菌 キクラゲノ類 土菌 ツチヨリ生スル類 石菌 イハタケノ類
等にして品數甚多し是宋人陳仁玉菌譜を著して甚詳らか
なり本草に云凡菌ハ六七月の間溼熱に蒸して山中に生ずる者甘
滑にして食しつべしといへども菌譜本草に載るところの本朝に
在所多くハなしされバ悉くハ辨じがたし○是を俗にクサビラと
といへども和名抄にてハ菜蔬にクサビラとよめり中國及九州の方
言にハなはとも尾張邊にはみくといふ

○芝 俗に霊芝といふ一名 耕名草 不死草 福草○和訓スカトデタケ○サキクサ

本草に五色芝といふ仙薬なり商山の四皓芝を採茹てくらふ群仙の服食とし又五色の外に紫芝あり以上六芝なり分中なりも紫芝ハおほし地上に生じて沙石中或ハ松樹下などにも一度生ずれバ幾年も同所に生ず初生黄色にて日を経て赤色を帯び長して紫褐色に茎黒して光澤あり芝の裏ハあれども滑らかなり味ひ五色に五味を備是一歳に三度花さくの瑞草にて日本延喜式にも祥瑞の部に見えたり瑞命禮に王者仁慈なれバ芝草生ずといふハ是なり○其形一本離れて生ずるもあり又叢て生ずるもあり又一茎に重りて生じてマヒタケのごとき物あり又茎枝を生じて傘なきもあり又さなく茎のミ生じて長三尺ばかりに枝を生じ鹿の角のごときもあり是鹿角芝といふ奇品なり近年伊勢の山中に出る凡て芝の品類六百種斗尚奇品の物本草綱目に委し○丹波にては首途祝ひて是を饋る伊勢にて萬年だけといひて正月の幸盤に飾る江戸にハ子コジヤクシといひ仙臺にてハゴシヤクシといひて瘧瘡を癒くなり

胡孫眼 是芝の種類なり木に生じて茎なし大なるもの四五尺にも及ぶ

○香蕈 ○一名 香菰 香菌 處蕈

日向の産を上品とし多くハ熊野邊にも出せり椎の木に生ずると本條にも但し自然生のものハすくなし故に是を造るに椎の木を伐て雨に朽さし米泔を沃ぎて薦をもて覆ひ日を経く生ぜて又檞の木を伐て作るもあり採て日に乾さども久て乾かし故に香気全し又生も飽しぜん木に生ながら乾しそるものにて香味甚佳美なり是故漢名家蕈といふ形松蕈のごとく茎正中に着くものを眞とし又漢に雷

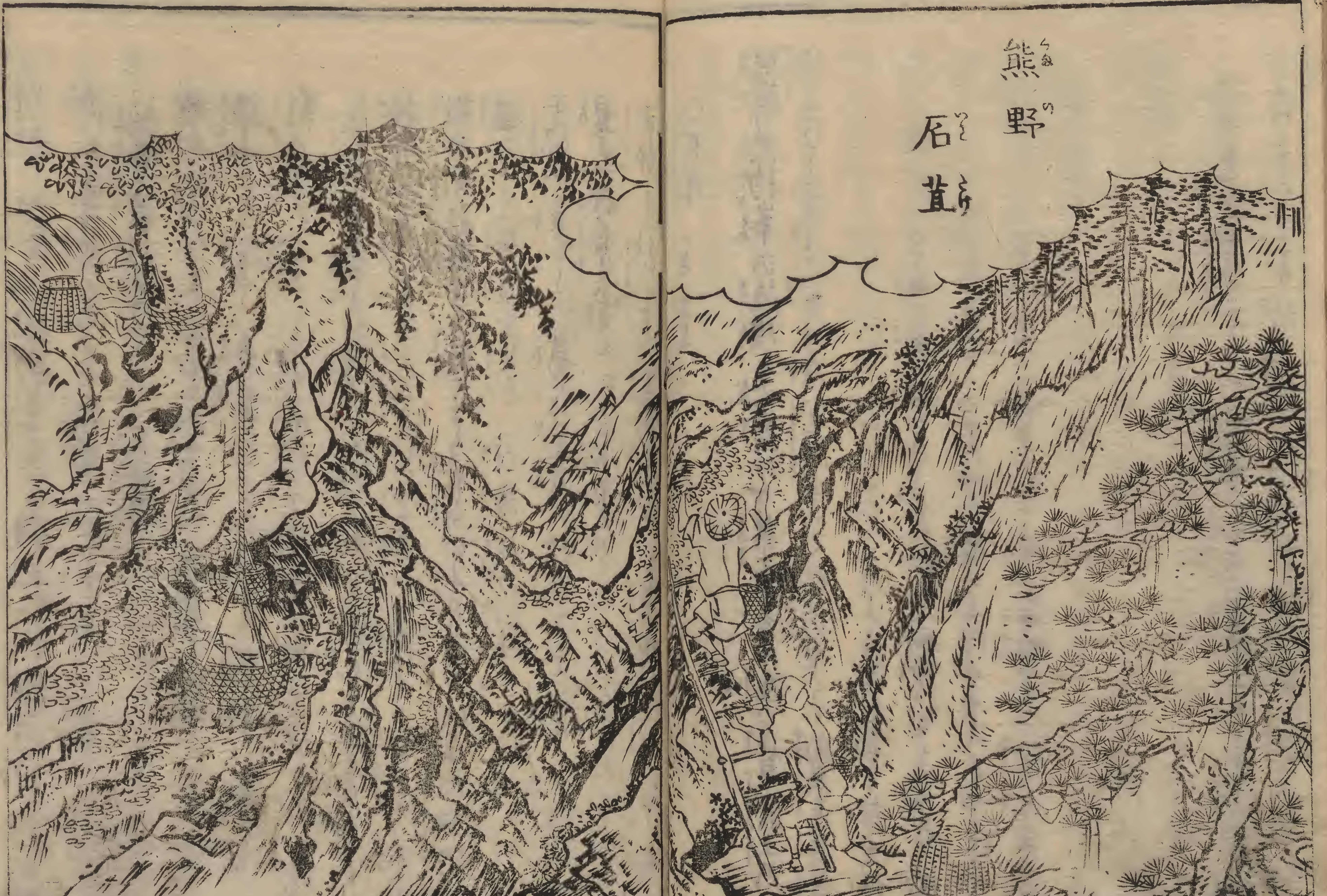
菌といふ物あり疑ふらくハ作れる蕈の類なるべし通雅云椿楡構栩
を斧をもてうち斫て其皮を久雨に爛かし米潘を沃ぎ雷鼓音
を聞けハ蕈を生ず若雷鳴ざる時ハ大斧をもてたゝく是驚撃てふ
忽蕈を生ずと云ふも是香蕈を作る法のごとし今紀州吉野又伊勢山
などにも作出せるハその日向にハ勝れり其法ハ扶移の樹を多伐て一所
にあつめ少し土に埋み垣を結まはして風を厭其まゝ晴雨に暴しおく
こと凡一年斗ありて木悉く腐爛しそろを候ひてかの斧をもち撃て目を
入置くのミにて米潘を沃ぐこともなしされども其始て生ずるハおそく
く大抵三年の後を十分の盛とし夫より毎年に生ずるのごとく
なられば又斧を入るゝ年と重ぬなり春夏秋と出て冬ハなし其
内春の物を上品として春香と称す夏ハ傘薄く味も劣れり又別
に雪香といふ絶品の物ハ縁も厚く形勢も全備ふ是ハ春香の内
より撰出せるものにて裏ハいづれも潔白なるを称せり

○石耳 一名 石芝

熊野天狗峯の絶頂に大巌あり其上に多く生ず皆山石上乃
嶮にあり夏月火熱の時ハ甚小にして松納のごとし面黒色裏青
色形木耳に似て薄く黒きハ岩にはさまりて生ず是を採にハ採
るもの縄にとりつけて或ハ畚に乗りて木の杪より釣りおろすなどの所為ハ図
のごとしよそ見の危を凌しさるハ似も猿の木ばなるゝよりもやさとし
鶯の子もうくのごとくおそく採ることあり今又吉野より出るものを
上品とす

附記

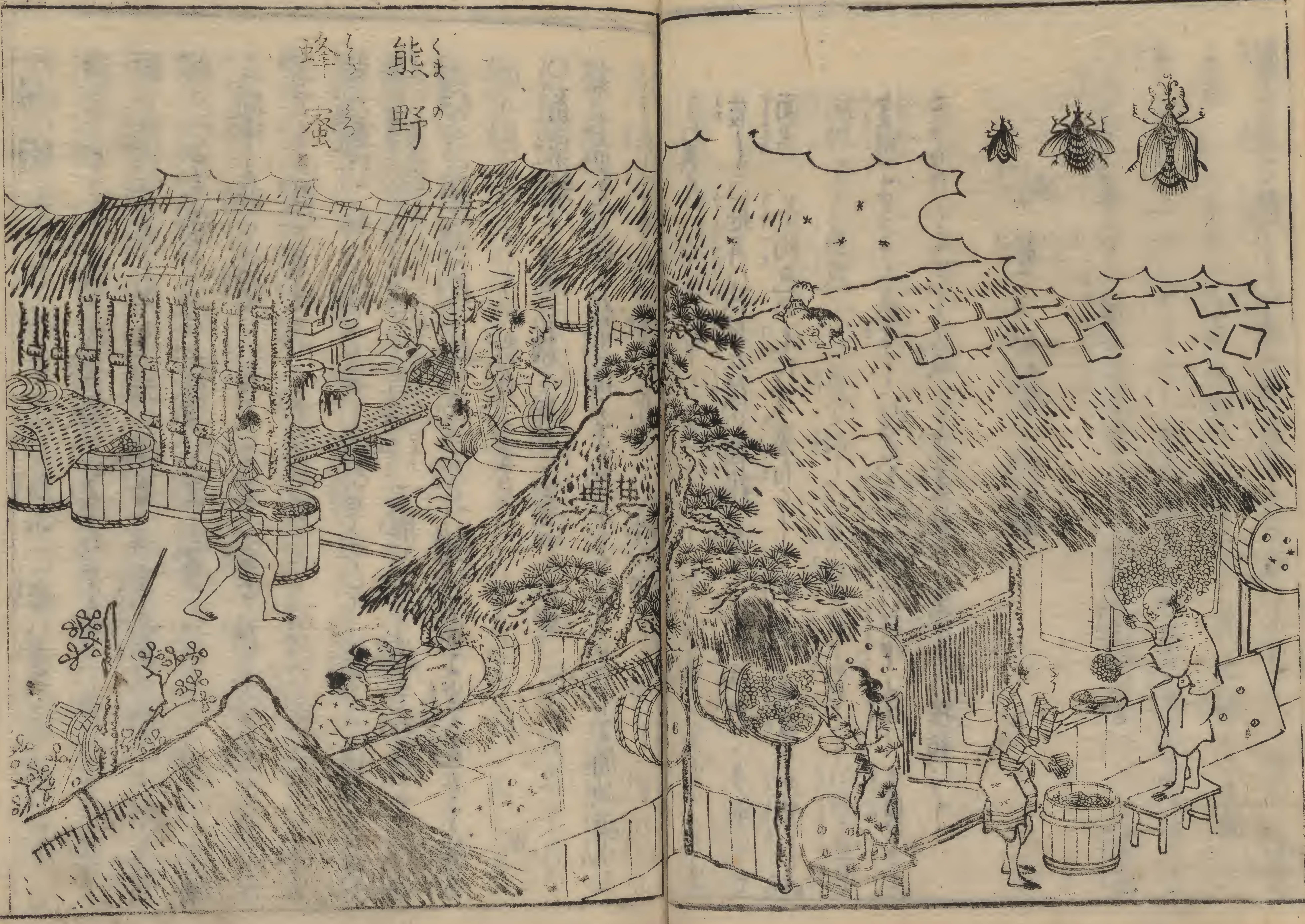
此余蕈の品甚多し○松蕈ハ山州の産をもつて上品とす凡牝松
にあらざれハ生ぜず故に西國ハ牡松多き故松蕈ハすくなくして萩


熊野石茸

蓉多し京畿ハ牝松多きゆゑに蕈多くして茯苓少なし○金菌ハ冬春の間に生じて松蕈に似て小なり○玉蕈○布引蕈○初蕈裏ハ緑青のごとし尾張邊にてハいぐちとよぶ○滑蕈ハ西國にてハなめたけと云冬生ず○天花蕈高野より多く出し諸山にも生ず○舞蕈ひらたけに似て一茎に多く重なり生ず針乃ごとし小にして尖ハ紫なり○木耳ハ樹皮に附て生じ初生ハ淡黄色に赤色を帯たり採て乾せバ黒色に変ず日本にて接骨木に生ずるを上品とす○桑蕈ハ二種ありてかたきハ桑の樹の胡孫眼なり軟なるハ食用の木耳なり此余槐楡柳楊櫨などに皆蕈を生ず○杉菌ハ杉の切株に生し ひらたけに似て深山に多し○葛花菜葛の精花にして紅蕈も此種類なり是に一種春生ずるを あみ鶯菌又さくらたけといひ丹波にて赤蕈南部にてしこたけ 雑蕈の名なり○蘆菌ハ蘆荻の中に生ずる玉蕈なり九月ばかりなり○蜀格ハハリタケ共云て常の針蕈に異なり本條ハ傘を張りて生じかさの裏に針有て白味苦し○地耳ハ張地丘陵の樹根に多く生ず脚短く多重生ず面黒く茶褐色の毛あり裏白くして刻なし皮蕈ハ色黒して此同種なり黒皮たけも是に同し○蕈類大抵右のごとし此余毒有て食用にせざるもの多し なるひろく竹蓐竹林中に生し土菌ハキツネノカラカサともいひ又是をも鬼蓋地芩鬼華の種類なり

○蜂蜜 一名 百花精 百芬蘂

○凡蜜ハ蜂醸する所諸國皆有中にも紀州熊野を第一とし藝州是に亞く其外勢州尾州土州石州筑前伊豫丹波丹後出雲などにに昔より出せり又舶来の蜜あり下品なり是ハ砂糖又白砂糖にて製して是を試ふに和産の物ハ煎ずれバ蜂のぼうり聚って舶来


熊野蜂蜜

の物ハ聚りてなす此をよく知る ○蜜ハ夏月蜂脾の中に
貯へて己が冬籠りの食物とせんがためなり 一種人家に自然と
脾を結び其中に貯ふる物を山蜜といふ又大樹の洞中に脾を結び
貯ふるを木蜜といふ以上熊野なるハ山蜜といひて上品とす又巌
石間中に貯ふ物を石蜜と云又家に養て採る蜜ハ毎年脾をと
来りて去る故に氣味薄し是を家蜜といふ脾ハたくさんに乾らし下に
器を兼けて解け流るる物をとれ蜜といひて上品なり漢名生蜜 法一ゝろ
槽に入分けてかへそを焚きて取なり但し
火氣の文武毫厘のあやまちを候と去すべけり 又脾を取り潰し蜂の子ともに研
水を入れ煎じて絞りて採りたるを 漢名熟蜜 凡蜜に定る色なし皆方
角の花の性によりて數色に変ずなど

○畜家蜂 漢名 花賊 蜜官 王腰奴 花媒

家に畜んと欲すれバ先桶にても箱にても作り其中に酒砂糖水を
ぬりて蓋に孔を多くしつけ又ハ大樹の洞中にも結びし窠の傍に
置バ蜂花のぼりて其中へ移るを持得て蓋を更めらく
笠簷端或ハ牖下に懸置なり此箱桶の大さまに規矩はあらされ
ども諸品等しからバ先九品邊一家の法と聞くに箱なれバ縦
九寸四方深さ貳尺九寸にして是を竪に掛るなり或斜横と置ハ
の者あり其箱の材ハ香のある物を忌こそかならず松の古木を
用ゆ是又鋸のまゝにて鉋にて削ることを忌む板の厚さ四歩ヲ半四方の
耳を隨分かたく造るにてはなく縄をかけざれバ後には甚重なりて是
のほう落損ずることあり戸ハ上下二枚にして下の戸の上に寸ほど
八厘横四寸斗の隙穴を開き蜂の出入のほとし若一二重も廣く開
きバ山蜂抔隙より窺て大きに蜜蜂を擾乱又大王の出るも此穴よりうかがふ
小さき物と箱の數ハ家毎に三四と限るべく其余ハ隣家れ軒を往て借て畜

○造脾

尋常の房の潼乃如き物にはあらず穴も下に向ふ
あるハ只箱一ぱいに造て穴ハ横に向ふ只人家の庭の家乃如し先

箱の内の上下ともに円月のごとき物を造てはじめ継ぐ下一ツひ両脇共
に盈しむ其厚さ凡壹寸八歩或二寸斗両面より六角の孔数多を
穿たる縞稲の膜に似く孔深さ凡九歩是のごとき物を幾重も製ふて其脾と
脾との間纔に人の指の通る程宛の隙ありて蜂其隙より下より潜ふり
全躰脾を下迄ハ盈さずといへバなり脾の形或ハ正面或ハ横斜などあり
て大抵円し其孔にハ子を生ミ又蜜及貯へ又子の食物の花を貯ハ又
子成育して飛び出入をするに及びて其跡の孔へも亦蜜を貯ふ凡蜜
はじめハ甚淡しさ露のなり年積んで日を経れバ甘芳日毎に進てこと
實に人の酒を醸とするに等し既に熟孔に盈る時ハ其表を閉て一
滴一気を洩さぬとなし蜂の数多なれバ其気味も厚し
○蜂ハ　小なり大さ一歩の許て凡ハ子に似く黄に黒色を帯多く
群て花をとる物ハ巣を造らず巣を造るものハ花を採らず時々ハ替
りて其役をいたらそむ夫が中に大王とてひとしほ大きなる蜂一ッあり

其王の居所ハ黒蜂の巣の下に一臺をかまへ是を臺とよぶ其余ハ
王乃子ハ世々継て王となるなりてより花を採ることなく毎日群蜂輪
値に花を採りて王に供す是一桶に一ツのみなり子を産むこと
雌雄ある物にはあらず道理にあいては希異なり群蜂是に従侍する
こと實に玉盤に向ふが如し又黒蜂十斗ありて是を細工人と唱ふ孔は
を守りて衆蜂の出入を撿み若花を持ざれバ孔に入らんとするもの
あれバ其懈怠を責て敢て入ることを許さず若再三に怠る者ハ遂に
螫殺して軍令を行ふに異ならず凡家にいふも野にいふも儀に
かわてハおなじ
○領脾　大王の子成育に至れバ飛んで孔を出るに群蜂是に従
ひ恰も天子の行幸のごとく擁衛甚厳重なり其飛行こと大抵五
間より十間の程よして本の枝に取附ハ其脊其腹に重りて至こ枝分
垂れるごとく一團に凝集て大王其中に在のごとく裏まる畜人是を遂て

袋を群蜂の下に掛けて羽箒を以て枝の下を掃ごとくに切落せば一團の
まゝにて其袋中へおちる其音至て重きごとし
てん蜂孔あるを穿し 是を用意の箱に移し畜なふを脾てるを得らるべく人の分家 今世は袋を敷て植りて衆蜂の氣を悦さしむるよし
なるに等し若其一團の袋へ落るに早く飛放る者ありて大王の従行
に便あらず其王ある所を知らば又原の巣へ飛帰る時は衆蜂敢て乱に
ならぬを不許争ひ起く是は螫殺し其不忠を正すに似たり見る
人慚愧して歎涙を流せり又八ツさがりとて昼八ツ時には衆蜂不残
桶の外に顕れて稍羽根を鳴らすとぞ三月は蜂の分散する時彼
王一群どの中に必一ツあり巣中に王三ツある時は群飛も三ツにわかる
其時畜なふ人の伝らて其翅を湿せば蜂外へ分散せずと皆元の器
中へ還る故に年々畜なふといへり

○割脾取蜜

是を採るには蕎麦の花乃凋む時を十分并に若
の成熟して採らんと欲する時は先蓋をホトく叩けば蜂皆脾の後
に移る其時巣九ツあれば二ツを切採三ツあらば一ツを残せば再其巣を補原おほしかく採ても
幾度とらへても又冬に至れば脾をもれ煎じて熟蜜とす ○一種土蜂とゑてさむ五寸斗
土を深く穿て其中に脾を結ぶ是にも蜜あり南部是をデツチスガリといふ但し
スガリは蜂の古訓なり古今集離別に　すがるなく秋の
萩原あさたちて旅ゆく人をいつとかまたん　又深山
崖石上に自然のもの数歳を経て已熟せる物ありまゝ土人是を崖蜜と
とぞ竹を以て刺て蜜を流し採る或は年を経ざるものも板縁取なり凡
箱に畜なふものの後にて蜜をとるも二十斤（百六十目一斤）蜜蠟二斤を得るなり
は二斤の内をもつて桶箱修造の費用に抵足るとなり

○蜜蠟　一名　黄蠟

是黄蠟といふ物にて即蜂の脾なり其脾を絞りたる滓なり蜜を
蠟を取るには生蜜を采たる後の蜂乃巣を湯に入煮て煎じ

沸そろふ時別の器に冷水を盛りて其上に藍を置きかの煎じたる
を移せバ滓ハ藍に留りて蠟ハ下の器の水面に浮ふを又陶器
に入て重湯とせざれども自然に結びて蠟となるなり又熟蜜をとる
時鍋にて沸せバ蜜ハ上に浮び蠟ハ中に在脚ハ底にあり是を水に冷
しても自然に黄蠟に結ぶ

○會津蠟

本草虫蝋白蠟といひ奥州會津に採る蠟なり是ハイボクラヒ
といふ虫を畜なふて水蠟樹といふ木の上に放せバ自然に枝の間に
蠟を生して至く色白し其虫ハ奥州にのミ有て他國になし故に
形を詳らかにせざど今他國に白蠟といふものハ漆の樹などの蠟を暴
してる白色なりまた薬店にて外療に用ゆる白蠟といふも蜜
蠟の暴したるにて是又會津にハあらず水蠟樹といふ木ハ山野ひくに多し
葉ハ冬青に似て小なり夏ハ枝の末ごとに小白花を開らき花の
後實を生じ熟して色黒く鼠の屎のごとし冬ハ葉枯る又此
蠟ハ刀劔に塗ときハ久しく錆を生ぜず又疵に貼ときハ自から
落故にイホオトシの名あり今蠟屋に售る會津蠟といふ物ハ眞僞を
はかりがたし

○鯢

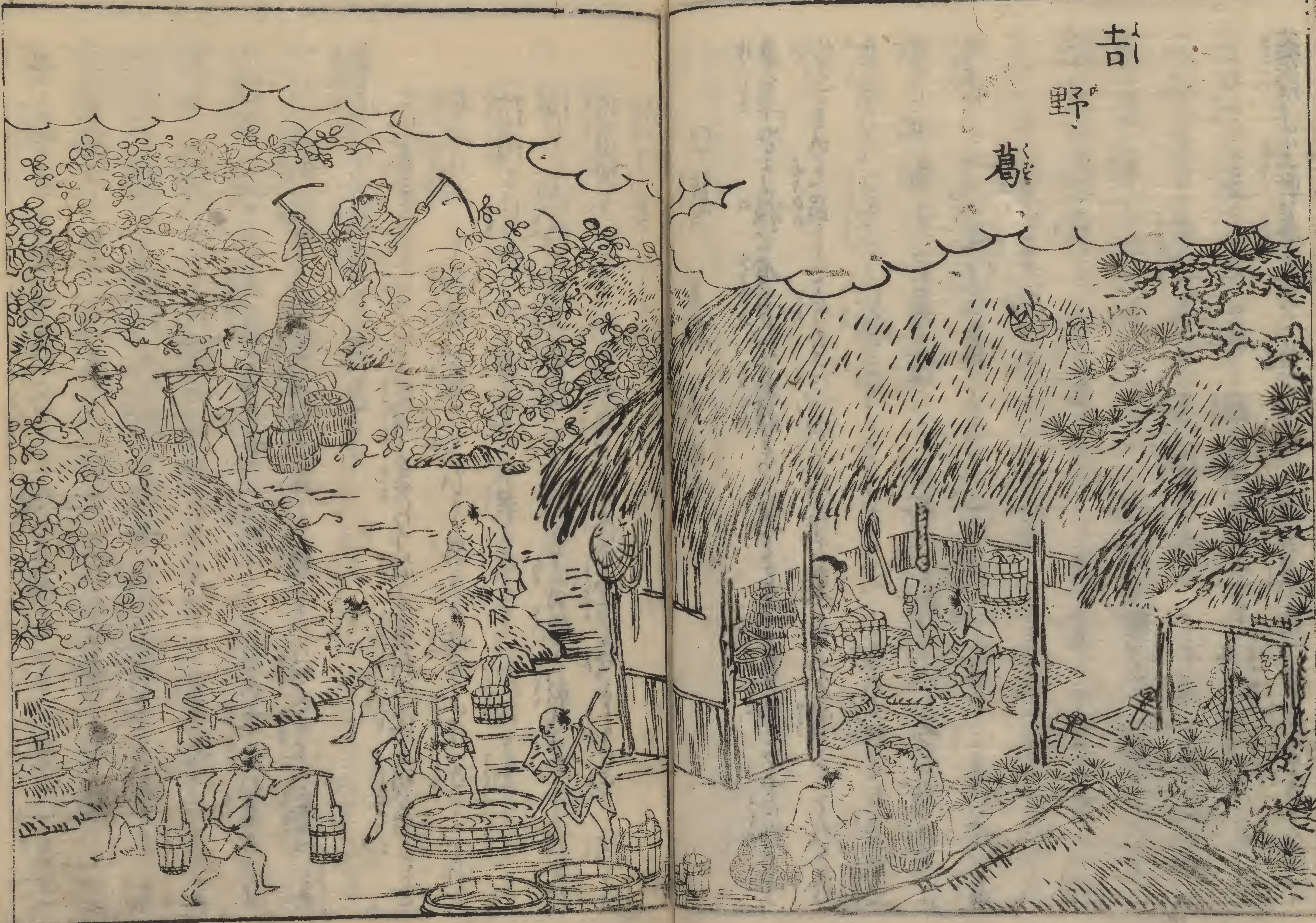
溪澗水に生ず牛尾魚に似て大なり茶褐色にして甲に班文
あり能く水を離れて陸地に行く大なるものハ三尺斗甚山椒
の氣あり又ハ椒樹に上て樹の皮を採て食ふ魚畜おけバ夜啼て小
兒の声のごとし性至く強き物にて常に小池に畜ひ用るとき時其
半身を截断其半を復小池へ放ちおけバ自ずから肉を生じ元の
全身となる故に作州の方言にハハンサキといふ又其去ごとる皮も久しく

さんせううを
山椒魚

ゐるく尚動なりといへり○別に一種箱根の山椒魚といふものあり小
魚なり越後にてセムグハンセウヲといふ其形水蜥蜴に似て腹は赤し
故にアカハラともいふ乾物として出し小児の疳虫を治す物理小
識に閩高の源に黒魚あり是なり今相州信州軽井澤和田の
邊より出る物もかのいもりのごとき物にて或る瀧の左右の岩を攀上
なり土人是を採るに木綿袋にて玉網のごとき物を底と巾着の
口のごとくにして松明を照して魚の上るを候ひ袋をさし附て尻から
入るを取りて袋の尻を解き壺へ納む又丹波但馬土佐よりも出せ
り○本草に一種鯑魚といふものあるなり此を山椒魚ともいへども是は
人魚なり河中及び湖水に生す形鯰魚に似て翅長く足のご
とし又時珍の稽神録に載る所の物も華考の海人魚なり
紅毛人氏海人魚の骨持来りて蛮名ヘイ・ジムルトと云甚偽なとの
多し

○葛　葛穀　一名　鹿豆

蔓草なり根を食ふ是を葛根といひ粉とするを葛粉といふ吉野より
出るものを上品とす今も紀州の土ハ扇太夫といふ人を賞すといへども
佳味なり是全く他物を加へざる故なるべし草は山野とも自然生
多し中華にハ家園に種る家葛と云野生のものを野葛といふ
日本にては家園に栽る事なし葉ハ𧄍豆に似て三葉一所に着
て三尖小豆の葉のごとくなり茎葉とも毛茸あり七月に花
紫赤の花を開きて紫藤花のごとし穂を成して下に垂る長
三寸斗莢を結ぶ是又毛あり冬月根を堀りて石盤にて打抑
き汁を去って金杵にてよく舂き細屑末となして水に浸し數度の漉し
しめ盆に盛りて日に暴し桶に納め多く出す　和方書是を水粉といふ
薬肆に生乾暴乾の二品あり○葛根ハ蔓あるを水に浸し皮を去って編連

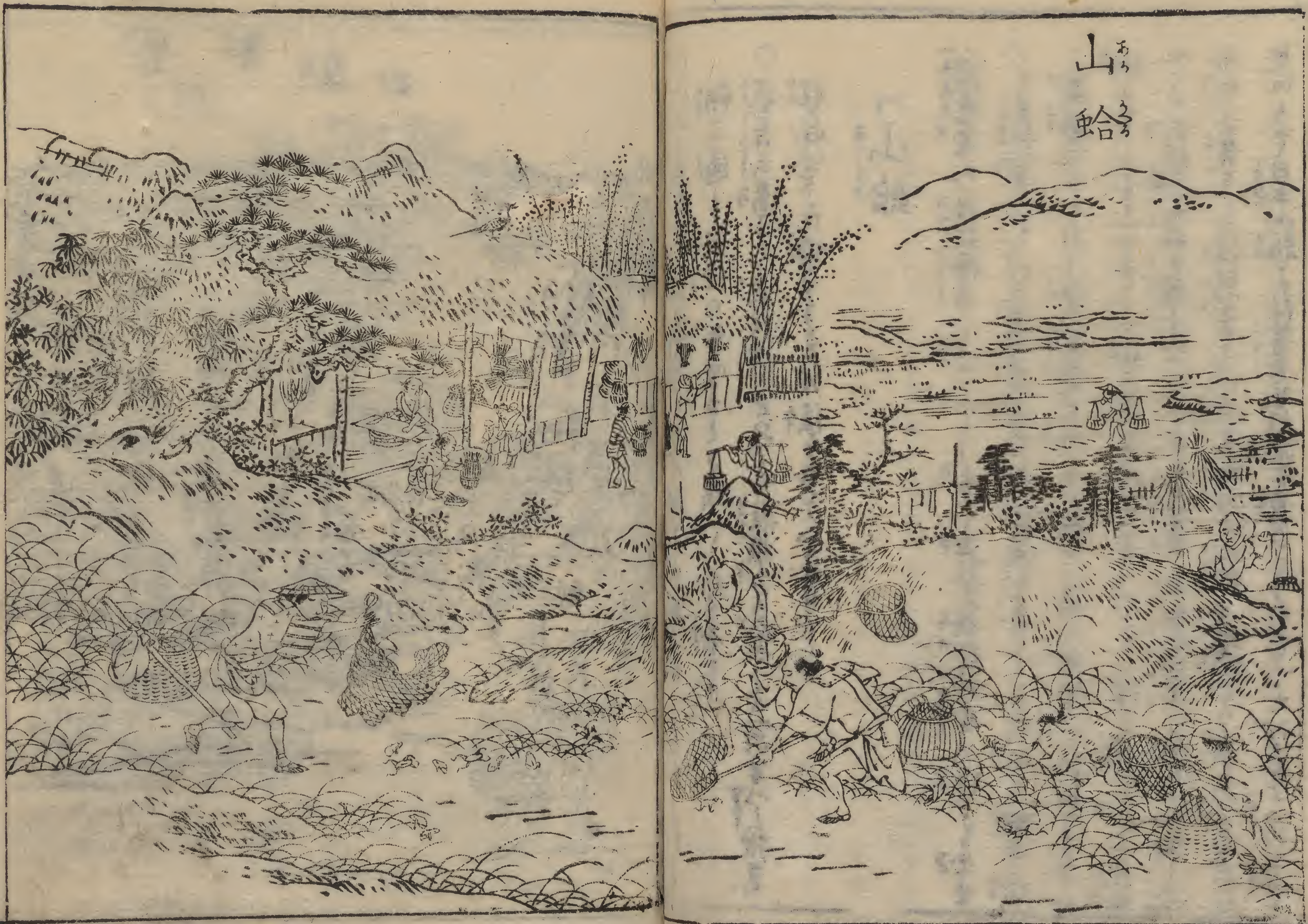

吉野葛

ねらし器とし是を葛籠といひて水にて製するところの是なり葛葉
の蔓をはらねるもの名なり○葛布は蔓を煮て苧のごとく裂
紡績して織なり詩経に絺綌と云は絺は細糸綌はふとき糸にて古
中華にて織るの今の越後縮のごとさもいふと見えたり○クスと云
は細屑のはなれてその粉にはきその名として草の本名は葛なり
フヂまた屏擬なり古製是をうたく鞭ととる故にうちくて表援と葛
衣といふまた葛布なればなり
これ葛へ世に根の花皮ともに民用に益ありし故に遠村の民や親属をさそ
携て山居して堀食ひ高く生ひし粉をとき時や山下に生ずれど
紡績もと皆人のために益し救ふ事五穀に亞ぐあり○蕨根も亦是に亞さそ
ほして水粉とは其品は賤しけれども人の飢を救ふにおいてはその
功用あるくとあり伯夷叔斉が首陽の山居も此によりて生一を保てり
乃物の生麩をうつして製し

○此余葛粉の功用甚多し或は餅又水麺に製し白粉にまじへ
糊に適し料理の滋味となし人に益を
○或書に云葛は毒を除くといへども其根土に入ること五六寸ほどなる葛
根とひてこれ頭なりこれを抜されば人に生せしむ

○山蛤

山城嵯峨又は丹波播州小夜の中より多く出る又摂津神崎の辺よりも出せ
ども其性宜しからず凡笹原茅原のくぼみにありて是をとるには小さき網にて伏
又唐網のごとくなる物の龍頭を両手に挟みて夜を廻りてひかりにて訪ね
網さるくとまわりて三尺四方許に廣がるなりかくし得て腸を抜きて乾物
として出す其色桃色繻子のごとくにして足甚長く目は扇の要に似たり但し今
市中に售るもの偽物多し○本草綱目に山蛤を蝦蟆より大きく色黄に
といひて日本の物とは符合せず是と異なるものなりといへり大和本草


山蛤（あかかへる）

鷹が峯
蘡薁虫

に長明無名抄を引て井堤の蛙是なり晩に鳴こそ常のかはづには變れり
色黒き様にて大きなれもちらぬらみて山蛤に見ゆるればつかなし

○蘡薁虫　本の一名　野葡萄

山城國鷹が峯に出る物上品とす蔓葉花實ともに葡萄に異なることなし
詩経六月薁を食ふとは是なり春の萌芽を出して三月黄白の小花穂をなす
まじ七八月實を結ぶ小にして多く色黒し藤蔓の類其茎吹ば氣出る汁有て通草の
ごとし蔓の往々盈きたる所ありて真孤の根に似たり其中の白き虫蟲あり
是小児の疳を治する薬なりとて枝も切て市に售る是を茎中に
蟲にくるし和漢の書に於く見えざるし柳の虫常山のむしもとは疳
薬とふなれども尚捗ありといふ又南都に眞の葡萄なし此實を採て核を
去て煎熬して膏のごとし食用とし又葉の脊に毛あり乾して揉み
艾絨のごとし是をもて附贅を治し故にイホヤらしれ名あり中に挿て酒に
醸し葡萄の美酒鬱金香と唐詩にいへるもの是なり
和名エビヅルといふべし誤りて未まりエビヅルを葡萄のことにて蘡薁
イヌエビスブドウといふは是なりて、ひしきなるし

田獵品

○鷹

甲斐山中　日向　丹後　伊豫等に捕るもの皆小鷹にして大鷹は　奥
刎黒川　上黒川　大澤　富澤　油田　年遣　大爪　矢保等にて
捕なり其の郡にて捕者凡て其の郡の鷹といふ白鷹は朝鮮より来て
鶴雁を撃つ者是なり　鷹を養ふ事は朝鮮を原として鷹鶻古書に
ありし故に本朝仁徳天皇の御宇依網屯倉の阿珥古鷹を献せしに其名を知
らざりしかば百濟の皇子酒君是は朝鮮にて倶知と云鳥なりとて韋緡小鈴
を着て得馴て百舌野遊獵に多く雉子を捕る故に時人其養鷹せし處を
号て鷹甘邑と云今の住吉郡鷹合村是なりされば我國に養ひ始し

張切羅弐もつて鷹を捕

東朝鮮の法を傳へたりといへり ○捕養ふ者ハ凡巣中に獲て養ひ馴き
しむ其中に伊豫國小山田には羅して捕るもあり此山ハ土佐阿波三國に跨たる
大山なりされバ鷹ハ高山を目がけて来るものなれバ此山に来り
凡七八月の頃柚の實の色付かゝる時を渡り来るの期とす
○羅ハもち切羅といひて目の廣一寸或二寸すべて糸にても苧にても作り竪
三四尺横二間許なるを張りて其下に提灯羅とて長三尺ばかりなるも周徑一尺
斗のもえん糸の羅に鵯を入れ杭に結ひ付又其傍に木をもて作りたる蛇の形の
よく似たるを竹の筒に入れ糸を鉄などに付て藪中より仕かけ置き早天に鷹来
来て其求食と見つけ其ちこの肉より蛇の糸を引て鵯のかた目より動かせ
ハ鷹これを驚きとらんて鷹是を捕んと飛下て羅にかゝる両方に着たる竹を
落をぬりて能く走る様にしかけし物にて鷹を翻さバ自縮まりて鷹の纒まる
ふと捕まなり此羅を張るに窮屈なりて是に庸易のことにはあらずとなりて其
獵師皆惣髪にして男女かちかさし冬も麻を重て着せり○此に捕る鷹多

ハ鶉又ハシタカともいふ○兒鷂の鳩なり逸物ハ鴨鷺鴻を取り白鷹の[illegible]
其斑もく有○かく捕て獲て後山又猪山大猪と差ありて竹もて苧を以し[illegible]
なるよりて冠ハ採皮を用ひ旋ハ竹の管又ハ鹿の角にて制る小鷹ハ低に
て尾羽をとり樊籠に入て里に養く○他國又奥州の大鷹ハ巣鷹と云て
巣より捕り其法未詳○餌ハ餌板に入て差へ飼○大鷹ハ尾袋羽袋をと
和らかなる布にて尾羽の筋に一如縫附る其寸法尾羽の大小に隨ふ

○以捕時異名

赤毛（一名悃撫 初鳥 秋捕らるとも） 黄鷹 巣鷹（巣よりとる） 巣廻（五六月巣立の頃捕る） 野曝鷹（山曝 木曝とも 十月十一月の頃捕らへ） 里落鷹（十二月に取る） 新玉鷹（正月に捕る） 佐保姫鵯 乙女鷹 小山鵯 鵯（[illegible]）

○鷹懐

獲たる羽なるを弁たるしとて是に人肌の湯をもて尾羽背の廻りに餌をさし[illegible]
を能く洗らひ觜爪を切て足緒をさして据をするなり据といふは[illegible]
人に馴るると視候夜時を聞て燈を用ひ夜よに据く山野を徘徊し夜を経[illegible]

はいく性を出に見せ又夜とかさねて次第にちかづくれば是は若始より火の光に驚かせては終に癖となりて後に水に濡たる羽を焚火にて乾て気づかさんため其外数多害ありさて夜据積りて鷹熟さしてふるひ身せらしなどして和らぎたるか見へく朝据をするなり是ハ未明より次第に朝を重ねて後にハ白昼に野へも出せり其時肉よくなり野鳥を見て目かゝらんかをかねて狩し小鳥を見せるに迎ひて是を捕らせり但し其小鳥の觜をさらりとらひべし括し兄鷹を啄ざらせさるためなり若又立なとして鷹おどろけバ終の癖となるを厭へばなり是を腰丸觜かするでれハいくつも鳥よく取得たる時ハ嘴血肉のをとかし飼ひ多く飼ゑば多く飼へハ肉ふとりて悪し尚是等に心を附く肥る痩る又ハ羽振顔貌なとの善悪或ハ大鷹は眸の小さくなると肉のよきさとし小鷹ハそれに反し又屎の色をも考へ能く調ハせて是を肉とこし飛流の活鳥を飼ふ（飛流し云ハ鳥の目を縫ひ野に出さく高く飛せて是を羽合せるなり目をぬふハ鳥一筋に飛ん為）是を手際よく取もへきなり山野に出て取飼ふなり

○巣鷹ハ巣より取りて籠のうちに艾葉兎の皮を敷きて小鳥をゑ細かに切りて飼ふべし少しも水を交へべし○初生をのり毛綿毛などと云又村毛ともいふる毛と生育の次第なり尾の生るを以て成長の期として一生二生をこえるといふなり三生に及べば籠中に架をさくるなり初より籠に蚊帳をたまて蚊の螫を厭ふ又雄を兄鷹といひ雌を弟鷹といひて是をこぞりにハ軽重をそろへても軽きを兄とし重きを弟とす又尾羽延び揃ひかたまりたる後ハ足緒をさして五日ばかり架にはなさず静かに据て三日ばかりて温湯を浴せるなり若浴ざれバふすかけて度を重ぬ縮てある羽を伸し尚前法のごとく活鳥をまろそして後にハ一のごとし

○鷹品大概

角鷹　蒼鷹　黄鷹とも云　波廝妙　諸とも兄ともいふ又知ざるをも云　鶻　雄なり形小し　隼　雌なり形大なり仕ふるに用之　鷂　雌し

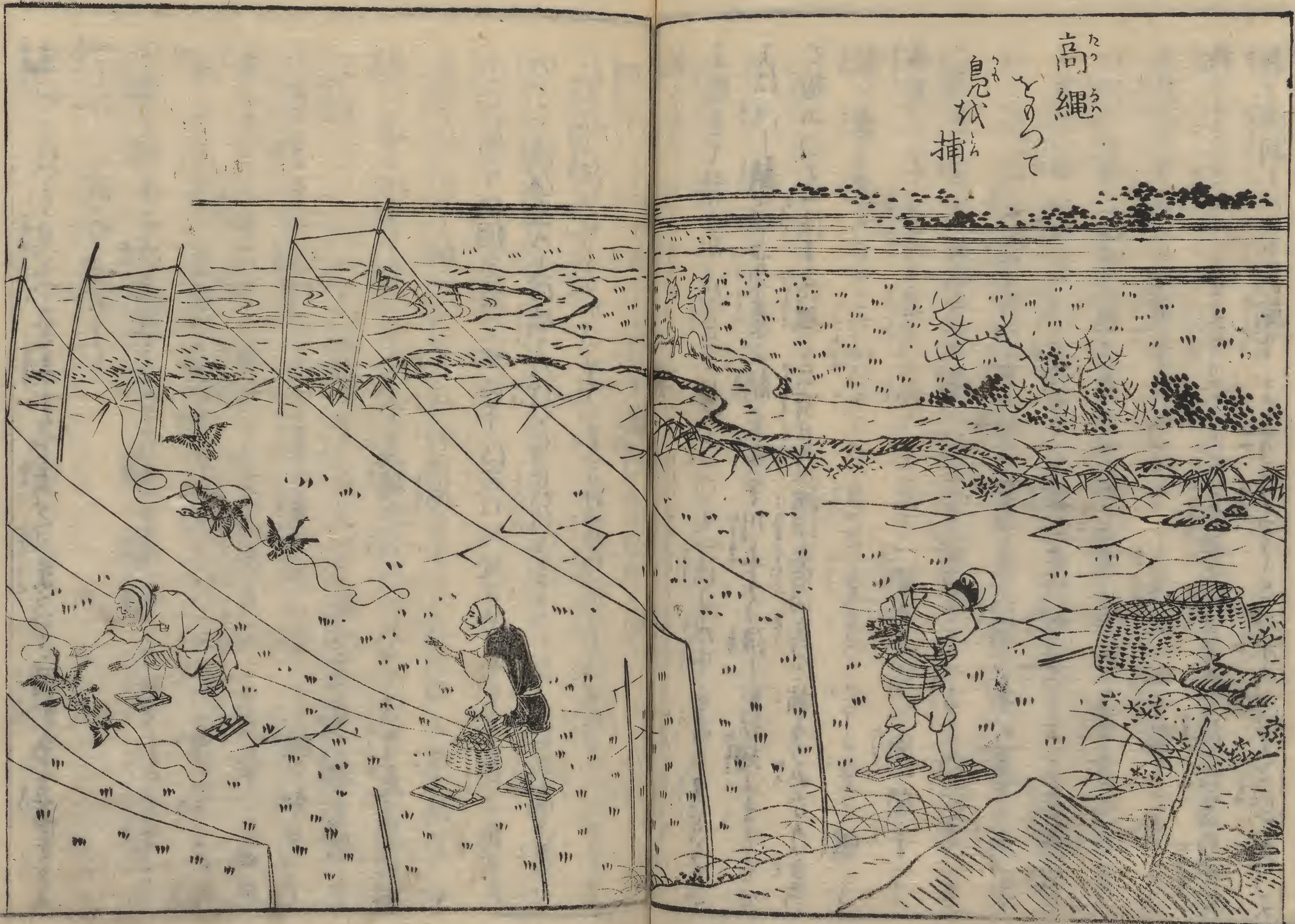
兄鷹　雄し　鶴ハ雄　雀鷂　鸊ともいふて品多し　黒ー　木葉ー　通ー　熊ー　北山ー　いづれも同品なり府をそろて別るゝ　雀鷂　小なり　鶍

鳩 赤鴘 青ー 底ー 下ー 裳濃ー ○鷲 全躰黒し年を経て白き斑種く又変じて首ニ毛ハ黒く眼ハ黄し背青く脛ニ毛ありて鋭きとあるべし
鵰 全躰黒し尾の府年を経て白く又変じて紫黒く青ぐし青く足青く脛ニ毛こゝろをくまたろとしき 其外品類多し ○任鳥
生くそにたるに惰鳥も種類なり くそはゝこ

大和本草ニ云鷹鶻方と案ずるニ鷹ハ類三種ありて鶻鷹 鷲鳥ろ今案ずるニ
白鷹鶏 角鷹鷹ハ鷹なり○隼鵯鳩ハ鶻なり○鷲鷹者ハ鷲鳥なる鷹鶻の二類
ハ教へ鳥とゑしむ鷲鷹の類ひを教へて鳥を成しめて又諸鳥ハ雄大なり唯鷹ハ
雌大なりし其事中華の書にも見えたり尚詳なることハ原本ニありてみべし此ニ略す

○ 鳬

○鳬ハ摂州大坂近邊ニ捕ることの甚美味なり北中嶋を上品とし河内
其次なり是を捕ふニ他國ニてハ鴨羅といへども津の國ニてハシキデと云て
横幅五六間ニ竪一間斗の細き糸の羅を左右竹ニ付て立る又三間程
ばかり隔て二重三重四重ニ張るなり是を霞網と云○又一法ニ池の辺ニ竹ニ
黐を塗て横に多くさし置ハ鳬渚の芹など求食とて竹の下を潜る
ニ觸まて黐ニかゝる是をハゴと云○又一法ニ水中ニ有る鳥をとるニ
ハ流し黐とて藻葉ニ黐を塗て川上より流しかけ翅にまとハせ
て捕ふ○又一法ニ高縄と云有是は池沼水田の鳥を捕る為なり先づ
黐を寒ニ凍らざる為油を加へく是を一度煮て竿ニ塗て轤り
巻取てさて両岸ニ篠竹の細きを長さ一間斗なるを間一間半り
一本宛立並べ右の糸を纏ひ張る事図のごとし一方ニ向ひたる一本
ハそれ竹は尖の切うけの筈ニ油を塗て糸の端をかけ置き鳥かれか
うかふニ付て筈とれて纏ひつくを捕ふ是を捌が落るといふ東西の風ニ
ハ南北ニ延べ南北の風ニハ東西ニひきさ必風ニ向ふて飛来るを待なり
又鴨群飛して糸の皆落る物を悉く捕ると云猟師ハ水足袋とて革にて
作れる沓をはき又下になんどと云物を副着して沼ふけ田の泥上を
行ニ便利とし又鳥の朝下ると宵に下るとは水の濁をもつて知る又


高縄とりつて
鳧城捕

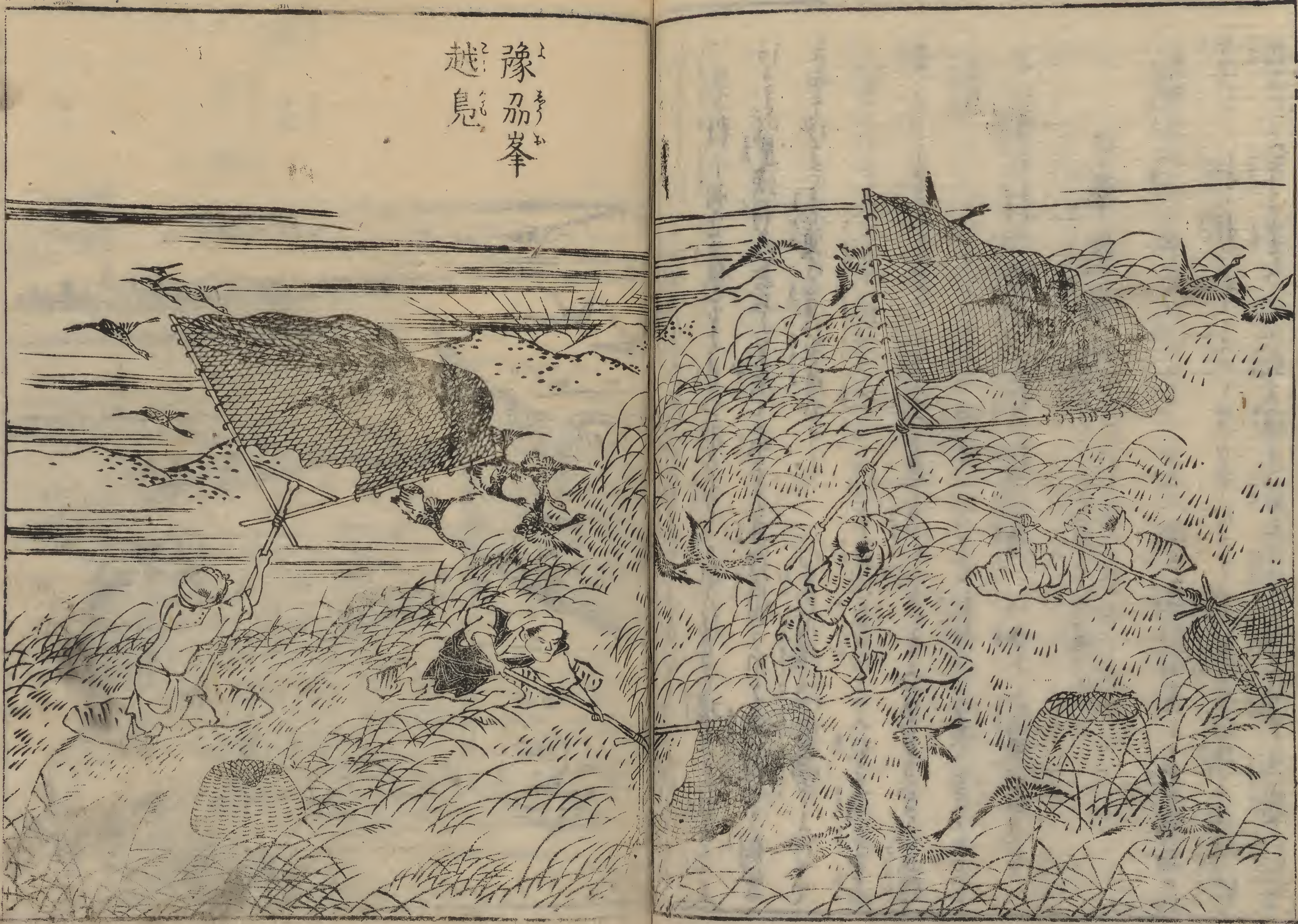
足跡によりて其求まはる来ざるを考へ且来るべき時刻など察するに
一もかゝらずといふ事なし
○鴈を捕るにも此高縄を用ゆといへども鴈ハ鴨より智さとくて之より
あやしき目の見ゆるの辺に餌の多きにハ下りず土砂乱たる地にハ下らず或
番ひ鳥の其辺を廻りて一聲鳴てとぶ時ハ群鳥随ひて去るなり高縄
の辺に下りれば縄師竹を以て急に是を追へば驚きて縄にかゝる事千
に一度なり ○又一法無双がへしといふあり是摂州嶋下郡鳥飼にて
鳧を捕る法なり昔はあつて高縄を用ひけれども近年尾州の縄師
に習ひてかへし網を用ゆ是便利の術なり大抵六間に幅二間許の網
に二拾間斗の綱を付て水の干潟或は砂地に短き杭を二所打網の裾
の方を結び留め上の端にハ竹を付其竹をもちてかひに両方へ開きえ
に杭に結び付よくかへるやうにしかけ四羅竹縄[illegible]
其前ともに[illegible]堀りて霍免穀稗など[illegible]時を待て鳥の群るを待[illegible]

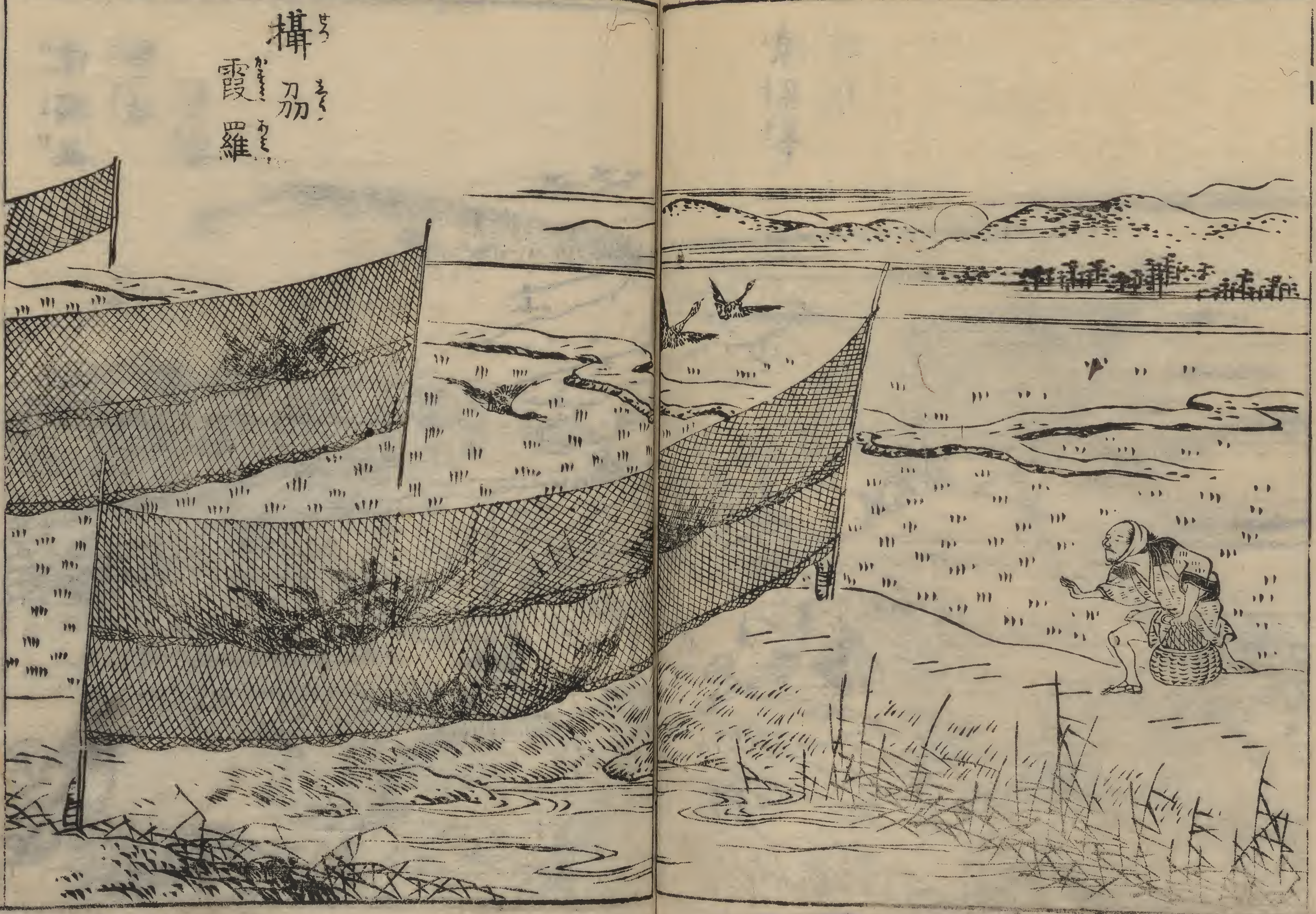
ひとへそらの網を二人がかりにひきくゝせばちのちる處ひらきて一つも漏さとらるなく
一発に数十羽を獲るなり是を羽をおちらびに待ちて堤などに杭に入まると
いふ是は羽がひをおさへて鷹を取るにも是を用ゆされども砂に埋めて餌置に
きかはりて未練の者ハ取獲がたし　○鳧ハ山澤海邊湖中にありて
人家にも畜ふ中華緑頭を上品とし日本是を真鳧といふ故に萬葉集に
青きをよませくものなり又尾尖る是は沈く小ガモといふ古名タカベといふ黒鴨
○赤頭へ○ヒトリ○ヨシフク○丸山フク　䴌鷉つミハヲミ○秋沙○トウ長○ミコアイ○ハシ
ビロ○冠鳥ミミヅク○尾長此外種類多緑頭小鳥アヂハ味よし其余ハよからず

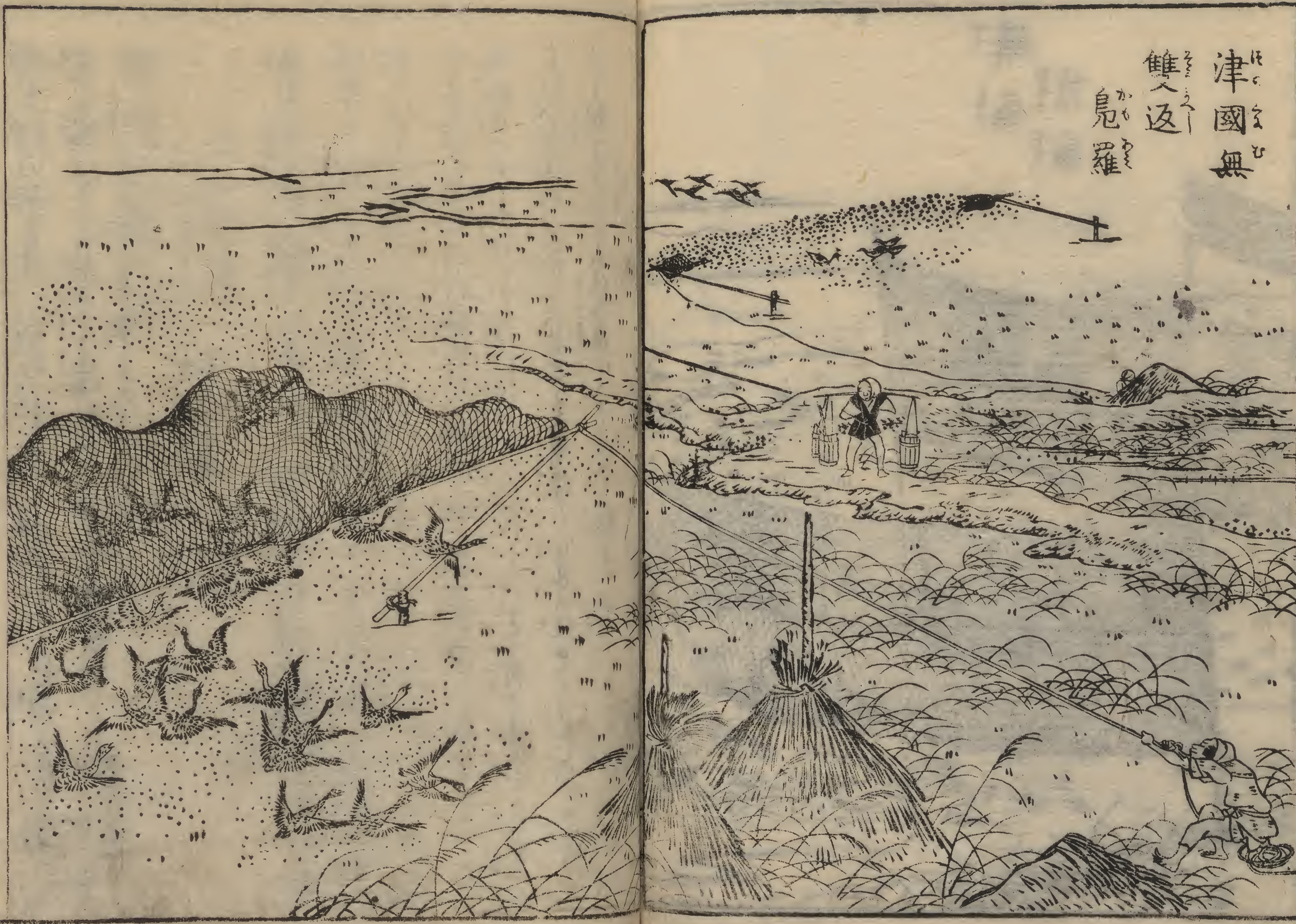
○峯越鴨

鴨の字ハアヒロなり故に一名水鴨といふ
カモハ鳧を正字とし今俗にあてる

是豫州の山に捕る方術なり八九月の朝夕鳥の群来る峯を越るに
茅草も翅に摺て切を高く生る事なき所に人其草の陰に周迴深さ
共に三尺斗に穿ちたる穴に隠れ羅を扇の形に作りて其要の所に


豫刕峯越鳬


攝刕
霞羅


津國無
雙返
鳧羅

長き竹の柄を付く穴の上ちつく飛まわるをふせ捕るに是も羅の縮
鳥に纏はるゝを捕なれバ練れ者ならでハ易く獲がたし
そうに乾かしもの闇き夜をまちらん
網をあげけるゝ坂網といふ
但し峯ハ両方に田のいりにはりとし

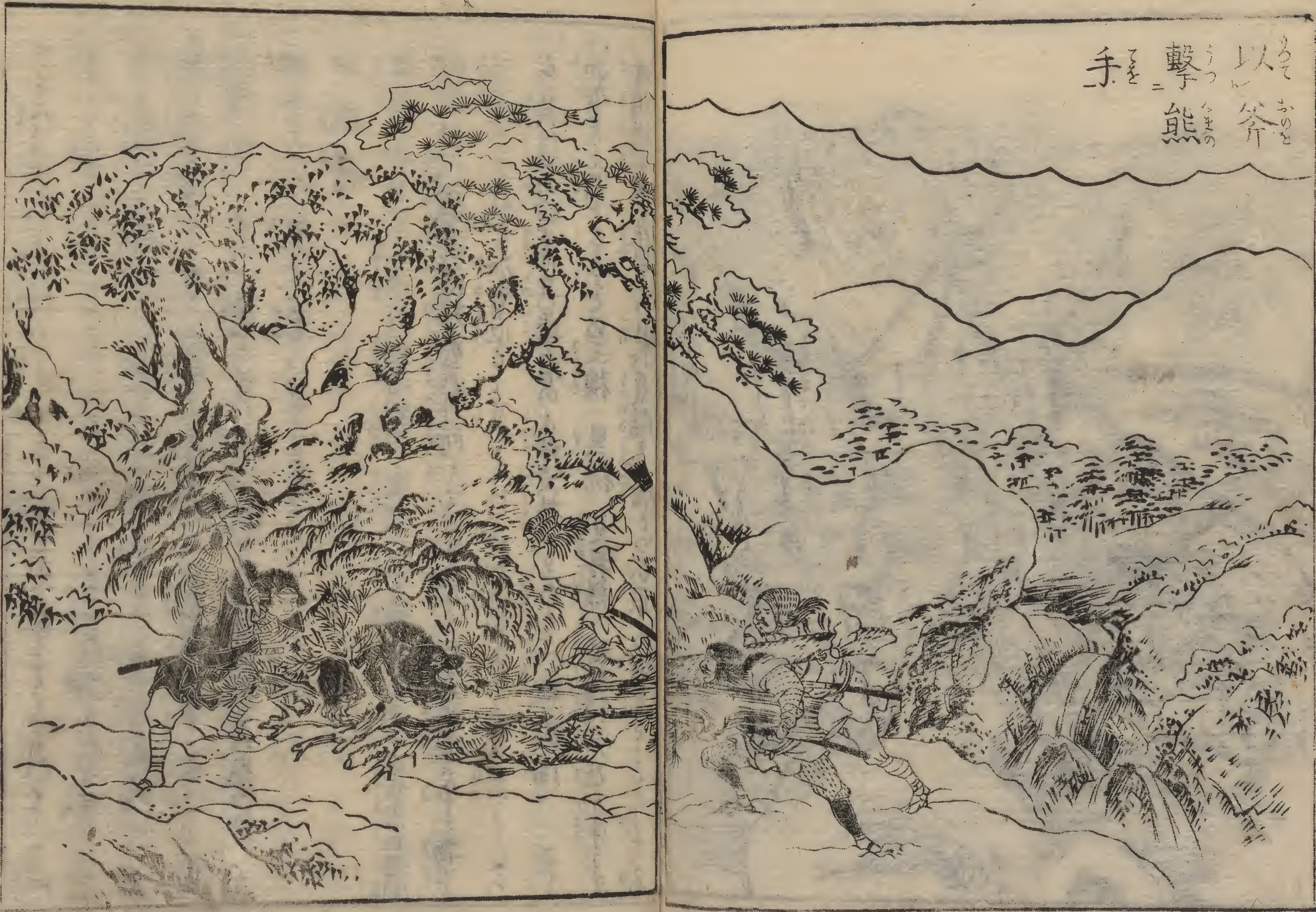
○捕熊

熊の一名子路

熊は必大樹の洞中に住みて冬眠る物なれバ丸木咬痕かぢりて搭
そのごとく然るを以て洞口を閉塞しさて木の枝を切て其洞中へ多く
入るれバ熊其枝を引入れて洞中を埋ゆゑおのれと洞口にいでゝ來るを待
て美濃の國にてハ竹鎗因幡にハ鑓肥後にてハ鉄鉋北國にてハなぎなたとつく
而薙刀のごとき物にて或ハ切或ハ突とも何れも月の輪の少上を急所
とす又石見國の山中にハ昔多く炭焼し古穴に住めり是を捕るに鐵砲
にてうちてハ膽甚小さし よて飽まで苦しみ憤怒せて打取
なり○又一法にハ落しにて捕るなり是球磨郡にて天井釣といふ 又ツリ
阿加にておとしといふ其様図にて知るべし長さ二間余の竹を伐て
死下に鹿の肉をかけて熊の餌とし又柏の實シヤクキ實などを餌とし時に
上にハ大石二十荷ばかり置く 又阿加にて七十五荷をおけば熊落ちたる
時乃青雷のごとし落ちて尚下より機をさし動かして二三日ばかり其止
時をうかゞひ石を除き機をはづせバ熊ハ土中に一尺余り
陥入て死なることとなるなり○又一法に陥穴にかくしも機の制に似り
守にも飛弾加賀越の國にてハ大身鎗を以て追廻して捕まへるなり
その穴にしそれを隠せし一寸をにらめバ熊立ちつて人ふむかう此時
又月の輪より一寸に突さ忽ち殺すもかゝりて突貫ぬくなりこれ
獵師の剛勇且手練早業にあらざれバ却て危きことも多し
○又一法に駿河府中にて捕るにハ熊の窠穴の左右に両人立ならび斧を振挙
待ち構へ外に一人が竿を以て樹の枝ながらとをつらね窠穴の中へ
と突探ぐれバ熊其樹をと窠中へひきいれんとする様なりて引に横ハ

陸弩捕熊

捕洞中熊


以斧撃熊手

ありて仕せされども尚枝の害ありしところを見とかくはきりのびて木の両
方より斧をもて木の付をおとせば熊こゝにあり力ゐたる物なれば是が為に
ほされて終に獲るなり膽を取て皮を出をとて奥加に通りて津輕にて
脚の肉を食ふ貴人の膳にも是を加ふ○熊常に食とするものは
山蟻 筍 ズカニ 凡木の實は甘きを好めり獣肉も喰ふなよりなど
蝦夷にては人の乳にて養ひ置もあり

○ 取膽

熊膽は加賀を上品とし越後越中出羽に出る物これに亞ぐ其余四國
播肥後信濃美濃紀伊其外所々よりも出る松前蝦夷より出る物下
品多しされども加賀必ずしも上品にもあらず松前かならずしも下品にもあら
ず其性其時節其屠者の手練工拙にも有て一概には論じがたし
加賀にて上品とするもの三種 黒様 豆粉様 琥珀様是なり中にても
琥珀様なるも傷あり是は夏膽冬膽とらひ取る時節によりて名
を異にして夏の物は皮厚く膽汁少し下品とし八月以後を冬膽とし
是皮薄く膽汁満て上品とはされども琥珀様は夏膽なれども冬乃
膽に勝る黄赤色にて透明で黒様は紫に似て黒光あるは是世に多し

○ 試眞偽法

和漢ともに偽物多きことの見えて本草綱目にも試法を載せり膽一
米粒許水面に點ずるに塵を避て運轉し一道となりて底へ線のごとくに
引物を眞なりといふ 按ずるに是古賀の法にして未だくさるに似
たり凡て獣の膽何乃物たりとも水面に運轉して熊膽に限るべからず或は
獣肉を屠て或は煮熬などせし家の煤を是亦水面にて運轉せしむるに
試みてきもつもされども素人業に試るは此方の外なし若止てを不
得水に點して水底への線を引と試るならば運轉疾く其
線至て細く走て疾勢物をなしとしは運轉遲き物又鈍になく
あって止まる物は皆よろしからず又運轉速きとしても盡く消ざる物も

佳からざる不佳物ハおのづから勢ひ砕け緩進疾ならず又粉のごとき物の落るも下品とすべし又水底にて黄赤色なるも上品にて褐色なるは極めて偽物なり作業者ハ香味の有無をもつて分別をなすなりて眞物にして其上品なる物ハ舌上におゐて俄に濃厚さ苦味とゞまらいを彼苦キ口に入て粘にくく苦味侵潤に増てには中ら然として清潔たゞ苦味のミにある物ハ偽物なり苦キの物と思へバまゝ羶臭香味の物ハ良からずといへども是ハ肉に養はれし熊の性にして必偽物とハ定めがたし其中初甘く後苦物ハ劣なり又焦気物ハ良品なかり是試法教へべく教へがたし必年来の練妙ありとも眞偽ハ辨じがたくして美悪ハ辨じがたし

○制偽膽法

黄柏　山梔子　毛黄蓮の三味を極細末とし山梔子を少し熬て其香を除き三味合せて水を和して煎じ詰めまたバ黒色光澤乾て眞物のごとし是を裹むに美濃紙二枚を合せ水仙花の根の汁とひきて乾かせバ裹し物と浹らざる様にし包みて綫にて板に挾みて陰乾となせバ紙の皺又薬汁の潤入りて實の膽皮のごとし故に冬月に製すれバ暑中に至りて爛潤の患なし故に必寒日に製す是ハ偽後邊の製にして他國も大抵かくのごとし他方悉く知がたし○又偽說あれども柿といふ物味苦し是を古傘の紙につゝむもありといへり　或ハ眞の膽皮に偽物を納めて物もまじりて是太く人を惑はすの甚しきなり

附記

熊ハ黒き物故よくてといふ名へどもさだかなる定説なし是全く朝鮮の方言なるべし熊川とコモガイといふ名も即クマガハの轉じたるなり今も朝鮮乃俗熊をコムといへり